
升物語 ~ CHEAT STORY ~

相山 美都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

升物語 ～ CHEAT STORY ～

【Nコード】

N4402Q

【作者名】

相山 美都

【あらすじ】

伯父に王をもつ伯爵令嬢レモーニ ミルネリアは、伯父が不治の病で余命1年であることを知らされる。そのために王になるための、多くの物事を体験する修行 国内旅行をすることになった。彼女は愛した執事を屋敷に残して、女従者だけの旅に出る。

これは、令嬢と執事と、彼女たちを取り巻くCHEAT チートな物語。

a・a a 怪物と女王（前書き）

そこにボクがいる 遠くにキミがいる
届かなくて 手を伸ばしても
重なるのは 一瞬だけ

ここにキミがいる 傍にボクがいる
怖いから 手を繋いでも
理解してくれたことは 一回もない

そこにアレがある ここにボクがある
届かなくて 手を伸ばしても
重なるのは 一瞬だけ

ここにキミがいる 傍にアレがいる
怖いから 手を繋いでも
理解してくれたことは 一回もない

僕が本を閉じると、少女は何か物足りなさ気に僕を見つめる。
その視線があまりにも気になって「どうしたの」と訊ねた僕に、
彼女はぶんぶんと首をヨコに振った。

僕は月に一度僕の家で、同級生たちと古本を売買する会を開いている。

この会に参加している年長者は僕の従姉弟で、年少者がこの大人しい少女レモーニである。レモーニは僕のフィアンセに当たる。5歳も年が離れていてよく同級生にはからかわれるのだが、僕はそれを気に留めていない。

彼女さえよければ、彼女が僕を選んだ時結婚するつもりだ。
それが何百年も続く王家のルールでもあるから。

まだ彼女は僕を見つめている。

彼女が持っている本は、元々は僕が曾祖父の弟　つまりレモーニの曾祖父にあたるのだが、彼から譲り受けたものだった。

その本の内容は、今父さんが国王だとして、その15代も前の国王の時代に記された物だといわれている。

本の主人公の名前もまたレモーニで、東方の邦から国内の隅々を旅行し、各地域で起こる混乱を鎮め史上3人目の女王となる。僕の目の前にいる彼女は、レモーニ4世となる。

彼女がこうして僕を見つめるのも、それは僕が仕組んだことだった。

僕の名前はロッダではない。

リヒャルト。レモーニー世や他の後継者を暗殺して王になると企んでいた恐ろしき怪物の名前。

僕は今彼女を試している。

本を読み終わった彼女が、僕を受け入れてくれるかどうかを。

a・a a 怪物と女王（後書き）

インデックス作りました！

活動報告とは別に作ってますが、各報告ごとにページURLを張っているので、是非インデックスをご覧ください！

a · a b 怪物(前書き)

あなたには、止められない欲望など理解できない

確かに僕は怪物かもしれない。思い当たる節はある。

物語に出てくるリヒャルトのような身の上ではないが、僕の心にはトゲがある。いや、トゲなんていうかわいい響きの代物ではない。爆弾だ。

爆弾が僕の胸には入っている。

誰にも気づかれず、こいつは僕の胸の中で回路をせっせと組み上げていた。

誰にも触れられず、こいつは僕の心臓と絡み合い愛し合っていた。僕はこいつなしじゃ生きられない。

危険な妄想はいけないと思っても、僕にはこいつを止めることができない。

こいつには意思がある。日中は犯したいと唸り続け、僕が寝ている間には実際に行おうとする。

夢だ、夢を食らう。

本の中の出来事を事細かに見せては「今しかない」と囁くのだ。

僕が彼女や従姉弟たちや親戚に会うと、足のつま先から憎しみが湧き出て殺意までもが脳内を刺激する。

「殺せ」と彼が囁き、左手が凶器を握る。

その鋭利なナイフに写る僕の顔は、いつだって笑っている。

微笑みを浮かべ、ありもしない善を装い、背後から忍び寄る。

そして、僕は泣く。

冷静になったとき、ベッドの上には僕の飼っていた動物の死骸が転がっていた。

幼き日から僕は彼のいいなりになっている。

僕は彼が恐ろしい。

今ではある程度、彼を押さえることができる。

しかし、もしも彼女と結婚した時、僕の手は愛する人の血で染まる。

彼女を殺す爆弾なのだ。

僕にはいらぬ。

彼女は相応しくない。

きっと、どこかに僕のことを優しく愛して、僕も愛せて、何も怖がらないでいい相手がいるはずなんだ。

だから僕は彼女に本を渡した。

物語に出てくる少年と同じ名前のソレと一緒にあってほしくて。

a・a c リチャード(前書き)

キミの死はボクの死だ

a・a c リチャード

僕は旅を始めた。

王子という肩書を捨てて。父の姓も母の姓も捨てて。

怪物リヒャルトは、普段はリチャードと名乗り用心棒の仕事をしていた。

だから僕もリチャードと名乗って、ライフルを担いで隣国の戦地へと赴いた。

僕はヒトに銃を向けるときにはためらいがなかった。

罪悪感、快感が薄れたときに襲ってくる。

夢で見た光景と一緒に。

僕はヒト殺しだ。

発砲する瞬間、僕の心臓は歓喜する。

止まらなくなって、気付いたときには味方に銃口を向けている。

冷静になって、照準を変える。

敵の全てを息の根は止めないで捕虜にする。

彼らの一人の頭も打ち抜いたことはない。

でも僕はヒト殺しだ。

あの夢が僕に囁きかけるように、僕はリヒャルトなのだから。

週に一度教会に行くと、必ずと行っていいほど、僕は孤児で金髪の少女に会いに行った。金髪は僕の国でもこの国でも珍しくて、

興味をひかれてしまったのだろう。

彼女といると僕は穏やかでいられた。

いつしか僕らは、互いの無事を祈りあうために毎朝会っていた。教会に敵は来ない。彼らは民間人を襲わない。

彼女は安全なはずだった。

あの日僕が風邪を引かなければ。

彼女は僕の見舞いに来た。

そして僕をかばって死んだ。

僕の目の前で彼女は殺された。

僕は初めて、僕のために引き金を引いた。

本当にヒトを殺してしまった。

快感はなかった。しかし、罪悪感も生まれなかった。

彼女は僕の爆弾を背負って死んだ。

a · b a 女王(前書き)

存在していたくなかった
存在してほしくなかった

どうして何も言わなかったの？

悲しみに暮れてたってもう遅い。彼はもう行ってしまったのだから。

彼がこの国を去って1年が経つ。

12歳になった去年の今日、私にキスをした彼は国境を越えてしまったの。

結婚するって約束していたのに。

後悔したってもう遅いのよ。

どっちにせよ私は第二後継者候補なのだから、王を継ぐ身であることは変わらない。

…それでいいじゃない。

彼が私に托した本に書かれていた物語は、ささやかな言い伝えだというのに。

ええ、彼はきつとそのことを凄く気にしていたのよ。

だから私にこの本を渡したんでしょ？

仕来たりなんて気にするお父様たちが勝手に付けた名前で、どうしてこんな悲しい思いをしないとイケないの。

分からないの。

どうして私の名前を、彼の名前を、付け間違えたのか…何度も聞いてはみたけれど、お父様やおじ様は苦い顔をして答えをはぐらかしてばかり。

ならなぜフィアンセなんかにしたのよ。
私が第二後継者候補だから？

そんな理由：あんまりだわ。

a · b b 約束(前書き)

終わったハナシ

a . b b 約束

父が用意した偽物の恋人、それは物語に出てくる“女王”の想い人であり下郎のロツダ。

まさか、本当にロツダっていう名前の男を雇うとは思ってもみなかったけれど。

そんな行動が、私の機嫌を損ねているの原因だというのに何故分らないのかしら。

私が好きなあの人とは、決定的に違うの。

いいえ、分かっている。

分かっているけど、彼を忘れてしまっている自分が怖い。

彼から遠ざかってしまう心が痛い。

彼に触れていればよかった。

ちゃんと喋ってればよかった。

一緒にいればよかった。

送られてきた、金髪の少女の写真。

とても美しい少女で、私なんかじゃ匹敵しないと思った。

彼のカルテも同封してあった。

心が快樂殺人犯のようだということ。

彼を変えてしまったのは一体何なの？

この少女なの？

ロツダは嫌い。

私と二人つきりしているとき、とても言葉遣いが悪いから。生まれて初めて「お前」なんて呼ばれたその瞬間には悪寒が走った。

金曜の夜、彼は私に寄り添ってクサイ詩を朗読する。

私がそんなもので恋するとても？

ふざけるのもいい加減にしてほしい。

この屋敷にいるとイライラするの。

そんな私を見兼ねた父母が用意するものといったら、今どき外に出かけられないドレスとか、指輪とか、くだらないものばかり。

私のこと、少しも分かってない。

別に分かってほしいつもりもないけど。

だから今夜だって、微笑みを浮かべてふざけたロツダの詩を聞いている。

彼が私の腕を掴んで「愛してる」なんて囁くの。

胃が縮みそうなのをこらえて、彼の手の甲に触れてあげた。

なのに、彼ったら「俺のことどう思ってる？」なんて真顔で聞いてきた！

ありえない。

答えないでいたら、彼の顔が近くなった。

去年の今日、口づけした顔が目の前のこれと合わさってのけぞいた。

違う、違う。

リヒャルトはこんな顔なんてしていないのに…どうして。

抵抗したら、首を噛まれた。

それで、わざといつもの顔を作っただけだった。

「俺じゃなくて、あんな殺人犯がいいわけ？」

思わず手を振り上げて、彼の頬に叩きつけていた。

彼はプライドをへし折られたかのように、しばらく頬を押さえていた。

彼は殺人犯なんかじゃない。

リヒャルトよ。

そう言いたかったけれど声が出なかった。

彼が頬から手を放し私の頭に腕を伸ばして、ずっと吐くのを止めていたため息を吐き出すように言った。

「忘れちまえよ。」

彼が無造作に私の髪を撫でる。

驚いたことに、先に見つめたしたのは私だった。

「何？」

彼は私を見ようとしない。

そればかりか、撫でていた手も止めて降ろしてしまった。

それでよかった。

彼の頬にキスするのは簡単なことだった。

彼は面食らったのか動かなかった。

今度は正面からしようと首を曲げたら、いきなり肩を掴んで距離

を取られてしまった。

「死ねよ。」

彼は立ち上がると、俯いたまま背を向けて行ってしまった。

残された私は一人ただどうすることもなく、ぼーっと風で揺れるカーテンを見つめていた。

ただ私はずっと、言葉を待っていたのだ。

忘れてしまえばいい。ただ一言、そう言ってくればよかっただけだった。

私は電話で下郎を呼んだ。

ロツダを呼んだ。

彼は数分後、ムスツとした顔で部屋に入ってきた。

「何？」

彼はいつものように私に近づこうとはしなかった。

警戒心が見て取れた。

それでも私は、彼を見続けた。

「言ってくんなきゃ分かんねーって。」

いつもはそこでオドオドと答える私だったが、首を横に振るだけにとどまった。

彼がため息を吐きながら肩をすくめる。

「用ねえなら呼ぶなよ。」

なんだ、分かっているじゃない。

私は立ち上がって、ドアの方へ歩み寄った。

「お、おい、あんまムリすんなよ！」

そう言っつて、倒れそうな私の腕をすばやく掴んで引き寄せた。彼の腕の中にすっぽり収まり、彼の鼓動が聞こえる。

「お前に何かあったら、俺が叱られるんだからな。」

ずっとこのままでいたい。安らかになれる。

もっと温もりを感じたくて彼の背中に腕を回したら、拒否されるようにまた肩を掴まれ引き離された。

「何すんだよ！」

私は答えられなかった。

必死に言い訳を探していた。

「マジで困るからやめろよ。何でお前に抱きつかれなきゃいけないんだ。」

彼の私を支える力が段々弱まっていく。

それが少し悲しかった。

思いの外、涙はすぐ溢れてきた。

でも彼はちつとも気付かないでまだ喋る。

「だって俺、ただの下郎だよ？ 女王になる人がこんなことしてい

いの？ やめるよ…こんなところ見られたら親父さんになんて言われるか…。俺まだそんな責任とか取れるほどデキた人間じゃないんだから…やめてくれよ…。」

鼻をすすって目をこすると、ようやく彼は泣いてることに気付いた。

「ハッ？ 何泣いちゃってくれてんの？ 俺にどうしろって言うんだよ。ていうか俺が何したって言うんだよ…。」

私は横に首を振った。

肩にかかる彼の手も振り払った。

久しぶりに、彼に命令していた。

「下がって…！」

言葉と一緒に、嗚咽が溢れだしてきた。

両手を覆って、その場にしゃがみこんだ。

彼の白い足元を見つめながら、泣いていた。

いつものように嘘っぽくでいいから抱きしめてほしかった。

声が廊下に漏れたのか、間もなく執事が入ってきた。

「何事ですか！？」

「ろ、ロツダが…！」

「俺は何もしてねえよっ…！」

執事の声が、怒りを彷彿とさせるようなものに変わった。

「早急にご主人様をお呼びいたします、お嬢様。ロツダ、あなたはお嬢様の体調の変化をそこで動かずに見守ってなさい！」

ドアの閉まる音が聞こえた。
そして間もなくドアが開く音がした。
ロツダの足は視界から消えていた。

ロツダはしばらく自室で謹慎することになった。
私がいけないというのに。

夜中、父が部屋を訪れた。

「具合はどうかね。」

父はベッドの傍に私の椅子を置いて座った。
目蓋は重くて開けずにいたけど、音でその様子が分かった。

父の手に自分の手を重ねた。

「ロツダは悪くないわ。」

手の甲を父のもう一つの手が乗った。

「レモーニ、彼をかばっちゃいけないよ。…それに本来ここにいるべきではないし、もうここにいる必要もないんだよ。」

言ってる意味が分からない。

分からなくて黙っていたから、沈黙の中にはもう一人部屋にいることが分かった。

「リヒャルトくんが戻ってきたのだよ。ロツダは、彼が本来いるべき場所に返すことにした。」

頬に、大きな手の温もりを感じた。

「キミを置いてきてしまっただけに本当に申し訳ないと思ってた。だが自分に決着を付けたくてね。」

懐かしい声だった。ずっと求めていた、あの優しい声。

「ただいま、レモーニ。」

彼の吐息を額が感じた。咄嗟に私は目蓋を押し開いた。本当に戦争などに行ってきたのだろうか。去年と何一つ変わっていない気がする。

「約束、覚えてる？」

私は首を縦に振った。

出発のときはお別れのキス。帰ってきたら結婚の誓い。私が無理を言って彼に立ててもらった約束だった。

「僕はあなたを嫁にもらいたい。」

そうして、あの柔らかくて優しい感触が、くちびるを奪った。

a・c a 敵と味方（前書き）

いつも一人だった

a . c a 敵と味方

何日経ったのか、分からなくなった。

俺はあの男と引き換えでここに送られた。

あいつが帰ってくるまでの間、あの女に尽くすだけでいいというから話に乗った。

報酬も弾むって言われた。実際、一生遊んで暮らせるぐらいもらったし。

…でも、もう踏んだり蹴ったりだ。

俺に女を口説く才能なんてないし、読み書きは習ったから読めたけど、詩は何が書いてえんだかよく分からねえし、敬語なんて使えるわけないだろ。

俺、兵士だし。

あの男は騙されてたみたいだけど、親父さんはあいつが死んだら俺を婿にするつもりだったみたいだ。

そんな気さらさらないけどな。

あの女もかわいそうな気がする。

足が悪い上に、あんまり動かねーから少し歩くだけでもふらふらしてたし、だからってあんな屋敷に閉じ込めなくても…な。

あいつだって、動けないの分かってて出たってたんじゃねえの？

別に俺はもう関係ないからさ。

もういいんだけど……泣かせちゃった。

あんな号泣してるとこ見たことなかった。

あの男のカルテが送られてきても平然と振る舞ってたのに。

謝らずに去るのはなんかなあ。

でも訳わかんねえよ。

なんでいきなりキスなんか…。

…関係ねえって。

金だけもらってさっさと次の仕事行こう

くそつ、何でこんなモヤモヤすんだよ。

あの女の顔思い出すだけで罪悪感っていうか…。

荷物をまとめて廊下に出ると、あの男が立ってた。

「もう行くの？」

「…報酬もらってからな。」

男は半分笑いながら、手を出してきた。

「…あ？」

「いや、握手を、と。」

「ガラじゃねえ。」

俺はあえて感じないようにしているが、こいつ、何か俺に敵対心を向けている。

ただ、戦場で感じるようなのは全然違う。

「そっか、残念だなあ。…そういえば、レモーニの目蓋をあんにも腫らせたのはキミって聞いたんだけど。」

「知らねえ。あいつが勝手に泣き出したんだよ。」

「キミが乙女心に理解がないからじゃない？」

乙女心？

ハッ、何を言うかと思えば。

「悪いな、俺はああいう女に興味ないだけだ。見てきたら、アンタだって。教会にいたきつたねえ孤児の女たち。俺はあいつらと話してる方がずつと楽だ。何も飾るもん持つてねえし、言いたいことはちゃんと言う。嬢ちゃんとはタイプが全く違うんだよ。」

男の顔色が変わる。

そっか、そういえばこいつ…。

「おおっと、悪かったな。アンタも同じ趣味だったっけか。」

「……そんな風に言うのは、やめてくれ。」

「あの子、アンタの病気と金髪に相当ショック受けてたぜ。俺と同じって知ったら、また泣き出すんじゃないか？ ハハッ。」

敵意が、はつきりと顔に出た。

そっかこいつは俺が嫌いなのか。

「いいこと教えてやるよ、彼女、俺にキスしてきた。」

「自慢でもしたいの？ 僕だってさつきしたけど。」

「ハナシはよく聞けよ。俺“が”じゃなくて、俺“に”だぜ？」

男の顔が歪む。
これは傑作だ。

ふと、廊下の向こう側で気配を感じた。あの女だ。

「レモーニー！」

戦場から生きて帰ってきただけあって、こいつも耳がキクようだ。

「松葉杖もなしに出歩いちゃダメじゃないか！」

男が駆け寄る。

やめるよ、泣かせた女の顔なんて見たくねえ。

やっぱり俺ツイてねえや。

「部屋に戻ろう。ね？」

「イヤ。ロツダと話す。」

ハッ？

俺に何の用があんだよ。

「ロツダ！」

女が足を引きずって近寄ってくる。

背を向けていても分かった。

毎日こいつの気配気にしてたから染みっついちまったんだ。

「ロツダ、ロツダ！」

俺のこと名前で呼んで…しかも叫んでる？
嘘だろ、あのなんも喋んなかったあいつが。
喋っても小声で、ちゃんと聞いてやんないと何言ってるかわかんないあいつが。

「ロツダー！」

俺にどうしろってんだよ。

また泣きつかれるのは嫌だ。

…ズラかるか。

「私も行く！」

…あ？

「私も、行く！ ロツダがいい！一緒にいたい！」

俺、寝ぼけてんのかなあ。

「レモーニ、そいつは本当に“殺人犯”なんだぞ！」

気配が動くのを止めた。空気さえも、俺の足も。

「…それでもいい！ ロツダと一緒にじゃなきゃイヤ！」

「何言ってるんだ！ 僕と約束したじゃないか！！ 結婚するって！」

「浮気も殺人も、嫌い！ でもロツダ、殺人しかしてない！ ロツダ悪くない！」

「いい加減目を覚ますんだっ！ そいつは金で雇われてただけなんだよ！」

「目を覚ますのは、どっちよ！ 嫌い！ 大っ嫌い！ 死ねばよか

ったのに！ 帰ってこなければよかったのに！ 私よりも、違う人
選んだくせに！」

喧騒が止まる。

俺にはもう荷が重たすぎた。

「お前ら勝手にハナシ進めんなよ。まず誰が連れてくっつたよ。」
「そんな…！」

「お前みたいな面倒なガキお断りだ。第一俺は…。」

「ロツダ、さっき言った！ 俺のことどう思ってるって聞いた！

私、今答える！ ロツダ好き！」

こいつ、本気でバカなのか…？

あんなの演技だつての。

「俺はお前なんてただの商売道具だよ！ 俺に構うな！ 俺はお前
なんかどうも思っちゃいねえって言うてんだろ！ もう知らねえよ
！」

報酬は後日徴収。

とりあえず一端こいつのいないところに逃げなきゃ。

泣き顔なんて晒せるかよ。

0・00 伯爵と令嬢（前書き）

私に贈る物語

知らない誰かに贈る物語

この国の仕来たりでは、王が死んで世代が変わるとき、次の王は国民投票で選ばれる。主席候補者は王族や彼らの血を受け継ぐ者だけで選ばれる。この時代、学者や錬金術師が貴族以外の貧富を問わずに民から排出され始め、王族らの学問に対するレベルは、群を引いて誇れるものとは言えなかった。しかし主席に、王になるために大切なことは勉強だけではない。熱心な候補者たちは、修行と称して旅をして、それに準ずることを学んで選挙に備えるのが昔からの決まりごとであった。それ故国民からの信頼は厚かった。

アゼレッセンという地名の田舎を治めるミルネリアという姓の老いた伯爵も、昔選挙をしたことがある王族の一人だが、惜しくも彼は数表の差で敗れてしまい、自分の好きな研究に没頭できるこの地を選んで、当時のミルネリア伯爵の娘の婿になったのだ。彼にとつて王族の姓を捨てることは容易いことだった。王となった兄と、愛してやまなかつた女性が兄の妻となった故郷で暮らすよりは、王族姓を捨てる代わりに自分をただ無条件で受け入れてくれる方がよかったのだ。

ミルネリア氏には、17になる一人娘がいた。彼の妻が病気で召されるまでは、よく家族三人で仲良く出かけていたりした。しかし伯爵は長年つき添った妻を失った悲しみから、研究に没頭するようになった。その傍らで育った娘、レモーニは伯爵令嬢だけあって、田舎では多くの少年たち、男たちにもてはやされて、彼女が欲しいものは全て彼らによって与えられていた。

レモーニの生きがいは、多くの男たちとコミュニケーションを取ることにあつた。彼女は亡き母に似て素朴な顔立ちをしていたが、笑うと非常に愛らしいし、男たちが好む愛嬌を兼ね揃えていて、また他の少女たちとは変わった性格をしていて、魅力的であつたのだ。

とある日レモー二のかかりつけ教育係が新しく赴任された。ミルネリア親族の豪邸で仕えていた18歳になるロッダという少年だ。ロッダは献身的にレモー二の面倒を見た。彼は屋敷というよりは、レモー二の部屋に住み込んで、彼女に全てを教育した。それは他の誰が見ても、仕事を超えた絆にしか見えなかったのだが、ただ一人興味を示さなかったのが伯爵で、彼はレモー二が何も不満がないのなら放つて置けと言及した。メイドたちはふしだらなと眉を顰め、下郎たちには羨ましい限りであった。

ロッダはいつでもレモー二の傍にいて、しかし彼女が他の少年たちと仲良さ気に喋つていても気にならないようで、その謙虚さから周囲の人々たちは彼のことを「若の夫」「夫」と呼んだ。

またある日に、ミルネリア伯爵の兄である国王が、不治の病で余命1年であるという通達が来た。伯爵は表情を変えずに執事の通達を聞き、研究のために走らせていたペンを横にした。そしてレモー二を呼ばせると、彼女の顔をまじまじと見て、ただ一言「次代の王になりなさい」といい、すぐにまたペンを握った。父親に命令口調で、しかも一方的言われることは彼女にとって初めてのことであったためか、彼女は嬉しそうに頷いた。

彼女は素早く修行に出るための準備を整えた。彼女はそれまで身支度させていた下郎たちの代わりに、顔も知らない少女たちを名声だけで雇った。

彼女が屋敷の人間を皆驚かせたことといえば、ロッダさえも屋敷においていくことに決定したことだ。その告知はなかった。ロッダや他の従者や伯爵でさえも、彼女が屋敷を発つ5分前まで、ロッダを連れて行かないことを疑っていなかった。

出発の朝、ロッダは朝早くレモー二を起こした。寝ぼけまなこのレモー二は、彼の首に手を伸ばして、彼の乾いた唇に自分の唇を押し付けた。

「お嬢様…まだ夢の中ですか。」

初めて彼女たちはキスをして、初めてお互いを抱きしめあった。ロツダは彼女と旅行できることが嬉しかったに違いない。そうでなければ、彼は彼女のキスを拒んだことだろう。またレモーニも、これが別れの挨拶でなければ、キスなどしなかつただろう。

アゼレッセンの中心地であるこの街に、伯爵と夫人の結婚以来の多くの民が訪れた。民の皆々は歡喜して伯爵令嬢を送り出した。レモーニは、幼馴染や村人たち一人一人に挨拶し、必ず立派になって帰ると宣言すると、綺麗な毛並みの茶馬にまたがった。そして乗ったまま、ロツダに微笑みかけた。

「絶対に、戻ってくるから、お父様を頼むわね。」

従者たちはどよめいた。ロツダ自身は、一瞬 どうして？

というようなショックを受けた顔をしたが、すぐにいつもの真面目な顔に戻った。

「気を付けて、いつてらつしやいませ。」

そうこうしてロツダは半年の修行の旅を憎むようになったのだ。同時に、彼は伯爵が使い古した羊皮紙の裏を使い、日めくりカレンダーを作った。右下に書かれた数字は、レモーニが屋敷に帰ってくる日を表していた。

彼の純粹さに、屋敷の従者たちは感心していた。一人だけそれをよく思わない男がいた。伯爵だけは既にロツダをミルネリア親族の豪邸に送り返すことを考えていた。ロツダとレモーニの間柄に興味を抱かなかつた彼だったが、それはレモーニがミルネリア令嬢である間だけで、次期国王になるのであれば話が別だからだ。伯爵と国王の妃とのように、愛し合った仲でも引き裂かれることは、王族の宿命であるのだ。

これが悲劇の始まりであった。そう、彼女ら王族の悲劇の愛はいつも、国王の死により始まるのだ。

0・00 伯爵と令嬢（後書き）

活動報告にて、この物語を語ります。

2011/02/11	公開ver.00
2011/02/11	改変ver.01

0・01 王と4人の子供（前書き）

主人公は一人だけじゃない

それ故主人公は存在しない

ライバルは一人だけじゃない

この世に生きる全ての人の

ライバルは一人だけじゃない

国の中心である都　都に住まう国民は、裕福な暮らしをしているので都のことを宮と呼ぶが　ここにも国王の死後の時期王を狙う王族や貴族が数名いた。

国王の第一子のガルードに、ガルードの腹違いの妹のセビアン。そして、妃が養子として育てている娘のヴィヴィアン。妃の弟の息子メルモーデ。

彼ら4人の王族貴族は、とても仲がいい従兄弟たちであった。それ故国王の余命宣告を聞かされた時、彼らの誰もが友情が壊れてしまつと肩を落とした。何故ならば彼らは王の座をかけて戦い合わなければならぬのだから。

ガルードはセビアンとヴィヴィアンの二人の妹を、父親か母親のいずれかまたは両方が一緒ではないのにとても可愛がっていた。また、亡くなった母の弟　つまり叔父の、息子メルモーデにも優しく実の兄のように接していた。彼は騎士道や勉学に励み、よく本を読み、大事な物事は慎重に進め、感情に左右されずに意見を発言するような子であった。

セビアンはその美貌とは裏腹に、傲慢な娘であった。しかし、妃や教育係の従者のおかげで、外見上は大人しくおっとりとした性格に見え、また多くのボーイフレンドがいた。

ヴィヴィアンはガルードやセビアンに恐縮しながら慎ましく暮らしてきた。彼女だけは、次期王になる権利を持ちながら、王にはなりたくないと思っていた。彼女自身、本当の父母が分からない。彼女は、妃と王が結婚する前　まだ前代の王が生きていた頃、妃が道に捨てられていたヴィヴィアンを家に連れて帰つたと聞かされている。そんな自分が王になるべきなのだろうか、いつもそう自分に

問うている。

メルモーデには野心があった。亡き父の、生前の野望を叶えたいとも思っている。それ故ひた向きに、自分が正しいと思ったことは真面目に取り組んだ。身分を隠し、無償で身体が利かない老夫婦の介護に当たったり、困っている人の声を聞いて回ったりもした。

不治の病の王は、子供や妃を愛さなかった。前代の王も歴代の王もそうであった。彼らは誰も愛せない。

現代でこそ、それは改善されてきたのだが、前代の王の時代は、誰もが王の座に執着していた。国民までも激しく執着していた。自分の領主が有利にさせようと、誰もが不正を働いた。一人違う意見を持つならば、その人間は殺された。後継者候補の彼らも、いつも死と隣り合わせだった。毎日毒見させた下郎が死んでいった。父である王が、政策を失敗させたり税を高くすると、一般人で仲の良いつたはずの幼馴染に石を投げられた。怖かった。誰も、愛せなかった。

そんなことを偲びながら、残された生命の日数を、王はベッドに横になりながら数えていた。

平和になったものだ。

屋敷に住まう4人の子どもたちを観察しながら、彼の一日が過ぎてゆく。初めて余命宣告された日、同じように子供たちを見つめていて、ふと王の頬には涙がこぼれた。あまりにも不思議すぎて、昔何度も夢見たことで、それならば自分が犠牲になってさえよかったと、思えるほどだった。

特に彼は、ガールドとメルモーデを見ていると、自分の若かりし頃をよく思い出してしまう。

弟は、元気だろうか。

彼の弟ミルネリア伯爵は、遠く離れたアゼレッセンという田舎に

住む。王を選ぶ選挙で敗れた彼の弟は、愛した人を捨ててアゼレツセンの伯爵令嬢と結婚した。そして伯爵夫婦に一人娘が生まれたとも知らせが入った。しかしそれ以来音沙汰がない。王は、弟が娘を次期王に推すだろうと考えていた。さすれば彼女は修行の旅をはじめ、この城にも来るだろうと踏んでいた。

それまで保つだろうか。

彼の退屈は、いつも訪問者で解消された。

朝にはヴィヴィアンが花を摘んできた。毎朝違った香りのする花を活けてきた。王には花は見えないが、漂う香りを楽しんだ。

昼にはメルモーデが、王の修行の旅の話の聞きに来た。王は彼にも分け隔てなく接した。

おやつ時間にセビアンが訪れた。毎日美しいおべべを着て訪れた。王には彼女が彼女の母の妾に見えた。

夕飯が終わった後、ガルドが訪れた。ガルドは視力の薄れた王に変わり、本を朗読してやった。その声に眠気を憶え、彼はいつも眠りについた。

そして目が覚めれば、いつも隣に妃が眠っていた。王の腕に自分の腕を絡ませて、まるで子供のように眠っていた。

王はそれ故幸せだった。

私は愛を与えられないが、皆は私を愛してくれた。

彼もまた、4人の子供たちが思うように、争いなどさせたくなかった。このまま平和に暮らしてほしかった。そして、自分も死にたくないと思っていた。

ある朝ヴィヴィアンが変わった香りのする花束を持ってきた。

「お父様、アゼレツセンの叔父様からお便りが届きました。プレゼントが沢山あったので、私たちが変わりばんこに持つてきます。そ

してこれもその一つ、お花の花束です。香りもここら辺で嗅げるものではありません。」

「そうかそうか、ありがとう。ヴィヴィー、キミがほしただけ花を抜いていきなさい。」

ヴィヴィアンは花や植物が好きだった。それ故とても喜んだ。

その昼メルモーデが訪れた。便箋をひらひらさせて持ってきた。

「伯父様、アゼレッセンのミルネリア伯爵様のお便りです。僕が朗読いたします。」

「そうかそうか、ありがとう。お礼にキミに、彼の話もしてあげよう。」

メルモーデも喜んだ。自分の野望にまた一つ近づける気がした。

おやつの匂いを漂わせ、化粧をしてドレスを纏ったセビアンが訪れた。

「お父様、アゼレッセンの叔父様からプレゼントです。ヴィヴィーとあたしにはドレスと化粧品を、メルモーデとお兄様にはマントと剣をプレゼントされました。そしてあちらの名物のお菓子や紅茶もくださいました。どうか一口召し上がってくださいな。」

「そうかそうか、ありがとう。キミも拵えなさい。」

お菓子に手を付けてない彼女は喜んだ。しかし彼女は、皿とカップを二つずつ持ってきてはいたが。

夕飯が終わった後、いつもより遅くガルドが現れた。

「お父様、アゼレッセンの叔父様にアゼレッセンの薬草を頂きました。医者に頼んで煎じてもらいました。どうかお飲みくださいな。」

「そうかそうか、ありがとう。」

王が宙に両手を伸ばした。ガルドはそつと器を乗せた。

「お父様、ミルネリア伯爵の娘レモー二嬢が、旅を始めたとお知らせです。僕らも旅を始めるべきですか？」

「…キミたちが自分で判断することだ。したければそうしなさい。」
ガルドは、内心怖かった。まだ元気なので行かなくてもいいと言っ
てほしかった。他の3人たちには言う勇気がないから、だから
彼が代わりに尋ねたのだ。

明くる朝彼ら4人は城を出た。数少ない装備を身につけて。必要
最低限な物を鞆に押し込んで。

彼らは門の外でクジを引いた。東西南北の書かれたクジを引いた。
ガルドは北へ行き、メルモーデは南に向いた。ヴィヴィアンは
東へ旅立ち、セビアンは西を目指した。

彼らは終始無言であった。これから始まることに期待と恐怖を抱
いていた。別れの挨拶でさえも短かった。

彼らの180日に及ぶ旅が始まった。

0・01 王と4人の子供（後書き）

4人の子供たちのお話は、ロマンスを少なくして童謡文学のよう
に、詩のように書きたいです。

0・02 不肖の子(前書き)

嘘を隠すために嘘を吐く

虚無を隠すための虚無である

無名の王子リヒャルトは旅の身支度をした。これから自分も旅を始めるべきだと悟った。たった一人の身内は、彼にとって親とは言えない存在であるが故、王族であるというのに彼は無名の王子であった。

彼の心の中は虚無であった。リヒャルトの心を埋めるものはなかった。それ故王子は、大切なものを見つけない修行の旅をしたと思った。

「僕は本当に王になるべきなのですか。」
彼は父親に尋ねた。

父親は誰一人愛せない心で、息子を愛したつもりでいた。
「相応しいのはお前しかいないのだよ。」
リヒャルトは虚無心で父の偽愛に応えた。

彼らの親子という関係は闇に埋もれていた。二人以外の誰も知らない。

主席選挙では、毎度100人近くの候補者が立候補する。選挙管理官は彼らの血液を採決し、それが親の遺伝のものであるかを調べる。また、血が繋がらない場合は、最も厳しいとされる方法で立候補を認めた。

だから主席選挙は、王族貴族の不肖が暴かれる場でもあった。父親にとって彼が選挙をすることは、自分の立場を悪くすることであったが、それ以上に彼を息子だと主張し王にしたい気持ちが強いのだ。

名もなき王子は降り積もる雪の中に飛び込んだ。自分の愛する女性に頼まれた通り、飛び込んだ。腕や脚を広げ、大の字のまま飛び

込んだ。

ズボツと鈍い音がした。リヒャルトはその冷たさ故に顔を歪めた。愛する人からの依頼とはいえども、イヤなことはイヤであった。それでも彼は雪の中に埋もれて見せた。

彼は静かに立ち上がる。そして、跡を新たに付けないようにそつとそこから立ち去った。

家でもある小屋の中に入ると、椅子によりかかって目の前の窓の外を見た。そこには、先ほどの雪の跡がある。

彼は筆を取ってキャンパスにデッサンを始めた。暖房の温かさのおかげで、冷えた体は温まった。

しかし彼の心は、愛する女性の前であっても、ずっと冷えていた。

0・02 不肖の子（後書き）

放置気味であるにもかかわらず多くの方にご覧頂いているようで、感謝しています。

ありがとうございます。

1・00 死気(前書き)

あなたを探す 後悔してしまつて

後悔しなければ あなたはいたのに

レモーニ一行が、トルマンガ王国の東の地アゼレッセンから旅立ってから二日過ぎた。

彼女たちは、アゼレッセンの山沿いの森を南に向かって進んでいた。方向が正しければ、既に隣の地に到着している予定である。

長旅をしたことのないレモーニにとって、旅を供にしている河馬ヒッポという用心棒屋の一味である女従者たちは、とても頼りになる存在だった。

「ビゼー…お腹がすいたわ…。」

レモーニは前方の黒馬に乗った鳥のような色をした女性に訴えかけた。

ビゼーは旅で最低限必要不可欠な物を低コストで備える才能に長けている。その横を歩く金髪のショートカットのエンヴレンは、剣術に長けている。また、レモーニの後方で馬に乗っているカレントは、銃の名手である。そしてまた見えないところには、一人隠密行動をするシュアンナが彼女たちを見守っている。

「お主が先程たらふく食べていたではないか。これ以上はもうないぞ。」

ビゼーは振り向きもしないでそう告げた。

その態度に少し腹を立てたレモーニは、困り顔をしてシュアンナを呼ぶ。

「まだ見えないの!? シュアンナ!」

返事の代わりに、雀の羽がひらひらとビゼーの馬の頭に落ちた。

「何で何も答えないのよ…。」

レモーニが肩を落とすと、前方3メートル先を歩くエンヴレンが足を止めた。

続いてビゼーも馬の手綱を引く。

「曲者だ。止まれ、レモーニ嬢。」

まだ陽の差す森の中で、鳥のけたたましい鳴き声が聞こえる。そしてそれは……。

「シユアンナ!!!」

東の方から、木々伝いに血色に染まった衣をまとった忍者が駆けてきて、レモー二の横の東側の木で足を止めた。

「遅くなって済まぬ……お嬢。」

「その傷は一体どうしたって言うの!」

シユアンナはふつと笑い、背中に縛りつけた大きな雀の羽の一本を抜いた。前方でビゼーも大きな鳥の羽を手をしている。

「そなたのご親戚の駒にやられてね……。」

シユアンナは怪我をした腕を、衣を引きちぎって止血した。

そして前方へ駆け出そうと息を整えていた。

「そんなんじや止まらないわ!」

レモー二はそれを制そうとして、金切り声をあげる。

「お嬢、我々の本領発揮とやらを……見守ってはくれぬか?」

シユアンナの目は、ギラギラと輝いていた。

シユアンナとビゼーは、従姉妹同士の結婚で知り合った。

生まれも育ちも違う彼女たちだが、年齢と生まれ持ったその戦闘能力においては共通するものがあつた。

14歳の夏、彼女らのちょうど旅先の国で、デモによる内戦が行われ始めた。逃げ遅れた二人はそのデモに巻き込まれ、その国の亡命を余儀なくされた。

だが、帝国側とその反対勢力　つまりデモ側のどちら側にも、スパイだと疑惑をかけられてしまった。

そして二人は別々に捉えられ、シユアンナは帝国側に、ビゼーはデモ側に捉えられたのである。

だが彼女たちはめげなかった。トルマンダ王国に帰還するため、各々に忠誠を誓い、シユアンナは帝国のスパイに、ビゼーは参謀にまで昇進した。それで二人一緒に帰る日を夢見て、内通し、とある

日チャンスは訪れた。

当時の彼女たちは、とても大人しげな少女であった。それだけじやなく、彼女たちは強かった。独特の戦法により、敵を蹴散らした。それ故、内戦により気性の荒ぶるか弱き女性たちへ嫌気をさした男らはことごとく彼女たちに惚れてしまう。

唯一中立を掲げていた若き教皇は、その凜とした顔だちのトルマ
ンダ育ちの少女二人に好意を抱くようになった。シユアンナもビゼ
ーも彼の気持ちを利用とした。

とある夜、教皇は屋敷に二人を忍び込ませ、永久の愛を語り合
い、朝が明ける前に国の外へ逃がした。

シユアンナとビゼーは、それ以来強い絆で結ばれている。

木々が風でざわめく。それまで無風と言っても過言ではなかった
のに。

それは一人の屍を歩かせていた。

レモーニのよく知る顔である。

「ロツダ!？」

屍は腐った異臭を放ち、破れた制服の隙間の垂れた肌の内側に見
える肉は、黒紫色をしている。それでもレモーニが彼だと気付いた
のはきつと …… 屍の首から上、すなわち生首だけが生きている人
間のように生き活きしているからである。

「どうして…置いて行かれたのですか？」

レモーニは愕然と彼を見た。主に、彼の頭だけを。

「僕は…あなたが好きなのに…どうして…。」

屍は、レモーニの瞳をそっと見つめた。哀しげに、彼女を見つめ
た。

「何処までも…追いかけます。それで…僕を…」

風が屍を運ぶ。従者たちをすり抜けて、レモーニの元へと。

「…愛して。」

一瞬、屍の体が、肉が肌が、破けた服までも、元のロツダへと再

生した。しかし、すぐに、その心臓を鈍色の物体が貫き屍の姿に戻した。

カレントの銃が命中した。前方ではシユアンナとビゼーがつまらなさそうに悪態をついた。エンヴレンだけは、いつもの無表情でその様子を傍観していた。

「案じてはいけない。そいつは、死^{シキ}気だ。今の男が、お前にフラれたあまりに精神を崩壊させてしまったのだらう。その暗い感情がそんな屍を作り出してしまったんだよ。悪気はないだらう。ただ、お前に伝えたかったんだよ。」

カレントは続いてぼそつと“愛してるとな”と呟いた。

レモーニは忘れようとしていた人を思い出して、涙を流した。泣いていることに気付いて、感傷に浸るように涙があふれ出た。

そんなレモーニを元気づけようと、ゼジーが南を指した。

「見る、森が開けるぞ。」

陽が落ちかけた森の先に、火の明かりと煙が見えた。

シユアンナがレモーニの前に乗り込み、馬を走らせた。

山と海と森に囲まれた地のクオオンツでは、自然の幸の料理が豊富だった。

落ち込んだレモーニを気遣ってか、ビゼーがクオオンツ最高級のレストランのオーナーに頼んで、割安でご馳走してもらおうように交渉した。

その味と言えば、無口な女剣士のエンヴレンが口を開くほどだった。

「こんな美味しい料理は何年ぶりかしら？」

ビゼーもシユアンナもそれに続けた。

「ヒツポは安月給だからな。いつも割に合わぬし…。」

「だが、お嬢のこの仕事が回ってきて悪いことはないな。」

カレントがもごもごしながら口を挟む。

「シユアンナ、あんたその腕は平気なのか？」

「ああ、お嬢に手当てしてもらったからな。」
レモーニはその和やかな光景を、ただ不思議そうに見つめていた。まるで、屍などと遭遇していないかとも言うかのようだから。
「そういえば、クオントには温泉があると聞いたけど。」
ひとり早々と平らげたカレントが言った。
「ああ、そうだ。旅館の者に案内を頼むといいぞ。」
「一人で行けと言うのか、お前。」
「お主、その年で何を申すか。」
エンヴレンがクククツと笑った。
「お前まで笑うな！ 別にいいだろう！」
シユアンナはそれを収めるように、手でカレントを制した。
「いいぞ、三人で行って来ればよからう。お嬢は某がお守り致す。」
エンヴレンも皿を重ねて言った。
「早風呂：だけど温泉ならいいかもね。」
「それもそうかもしれぬ。」
「ビゼーは飯を掻き込んで飲み込んだ。」

三人がレストランを出た後、レモーニとシユアンナはゆっくりと食事を続けた。

「お嬢、お嬢も愛しているんだろう。」
シユアンナは唐突に切り出した。二人がデザートを口にする前だった。

「男の未来について行かぬと決断したお嬢は偉いのだぞ。」

レモーニは目をパチクリさせた。

「どうということ？」

「愛などは決して永久ではない。先刻の屍：死気ですら、本物が死んでしまえば消滅するし、形成することはないからな。死んでしまえば…愛など無意味だ。」

「気持ちは生きるわ？ 例えどちらかが死んだとしても。」

「いいや…お嬢にはまだ分からぬだろう。愛しても死んでしまった

男を探す死気の気持ちなど……。」

「……それは、誰の話？」

シユアンナはフツツと笑った。

「某の話だ。昔、愛していた人がいた。慈愛に満ち溢れていた優しい男だった。そやつは……死んでしまったけどな。若き某は、男を求めて毎日負の感情を高めて死気を作った。死気を、何体も何体も至る地に送り込んだ。しかし男は見つからぬ。そればかりか、某の男を慕う気持ちは少しずつ薄れて行った。ヒッポの経営主が、ヒッポを各地に派遣して幾つもの死気を倒してくれたらしい。死気とは元々負の感情故、それを斬って消滅させてくれたおかげで、某の恋心とやらも、悲しい感情も、無くなってしまったのだらう。お嬢の想い主も、幾度となく死気を作り出し探し出そうとするだらう。もしもまた彼が来るときには、お嬢が斬ってやれ。お嬢の手で彼の心を救ってやるがよい。」

レモーニは話を聞き終える頃、両手で顔を覆っていた。ただただ、頷いて。ロツダを思い浮かべて。

私のこと……忘れてしまっても……あなたが楽になるのなら。

レモーニは、死ぬ前には絶対彼には一度会おうと思った。そしてこう言いたいと願った。“愛してるわ”と。

1・00 死気(後書き)

おしやくと章へ。

読了お疲れと幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4402q/>

升物語 ~ CHEAT STORY ~

2011年4月13日04時15分発行